
ちょこで とりっぷ

yukaringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよこで とりつぷ

【Nコード】

N8951D

【作者名】

yukaringo

【あらすじ】

おなじみのちよつとおバカな中学2年生、成瀬歩。バレンタインデーのチョコを食べたことで、不思議な世界へトリップしてしまいます。

第一個 始まりはバレンタインデー

何？

.....コラ、

2月14日、朝8：00。

そう、今日はバレンタインデー。

私は誰にチョコをあげるわけでもなく、ただいつもどおりに登校した。

登校中、彼氏いない暦十四年の私をあからさまにバカにしたようなフィンキをかもしだすバカップル達がいたので、私の愛犬の田村ブルドッグをバカップルの元へ離してやった。

あ、田村は凶暴だからね。・・・というのも、田村を拾った当時にお父さんが田村に噛み付かれて病院送りになったからだよ。

・・・うわ、またバカップル発見。

アツツ。地球温暖化の原因はこいつらだな。

私はその場から離れ、校内に入った。

下駄箱のふたを開ける。

すると中からドサドサドサ。

チョコレートだったびよん

んで、冒頭に戻る！

・・・あのね皆さん。お分かりかと思うけど、私はおんなのこだよ。

今日はバレンタインデーで、女の子が男の子にチョコを渡す日だよ。

なのに、

なのに何で私の下駄箱にチョコレイトがあるんだあああああ
あ!!!!!!!!!!!!

あのね私、そんなに男前じゃないし、運動神経良くないし、成績はヤバいし、特別美人でもないし、図工が得意ってだけで、それ以外に何にも取り柄無いよ。

・・・・・・あ、そうか。

取り柄の無い私にチョコが届くなんておかしいなら、そう！これ

は別の人の下駄箱！

私は下駄箱のふたを閉めた。

うそ――

――ん！！！！！！

これ、私のやんけ！！！！

それなら考えられることは一つ！！

チョコを入れる人が下駄箱を間違えた！！

私は、チョコレートの包装紙に書いてある宛名を見た。

!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

宛名に……「成瀬歩」って！！

•
•
•
•
•
•
•
•
•
h
?

・ ・ ・ ああ、私の名前？成瀬歩だよ。

!!!!!!!!!!!!

このチヨコって私宛て!?

ちょ、私の乙女としての道が大ピンチ!!道が崩れていくよ!

.....あ、そうか。

コレって、新手のイヤガラセだろ?

ん?どこがつて?いや、あれでしょ。中に裁縫針とか入っちゃつてたりするんだよ。

.....やってやろうじゃねえの。

私は喧嘩を売られるとき、どうしても買いたくなっちゃうんだよね。

それって、普通じゃない?

え?普通じゃないって?

まあどうでもいいよ、そんなんw
じゃあ、

す！

あれー？

頭くらくらする。

まさに「思考回路はショート寸前」ってやつ？

あー……………もう、脳内で何語ってんのかさえわからなくなってきた。

もしかしてポイズン入ってた？

あー……………もしかしなくても「ポイズンクッキング」ってやつ？

あ、もうだめだ。

さようなら現世

アリベ出る血

ここで、私の意識は消失した。

第二個 関西弁バトル

目が、覚めた。

というより、覚まされた。

誰につて？

妖精。

ちよ、待って！「あ、こいつもうだめだ」みたいな目で見ないでくれ！

んで、まあ。妖精に起こされたんですよ。

ここどこだつて聞いたら「ちよこの国」って言われたもんで「あ、こいつもうだめだ」つていう目で見たら、頭をひっぱたかれました。オマケに、

「ちよう待てやあ！なんやねんその視線は！」

とも言ってた。

まあ私もそこは冷静さを取り戻して、

「信じられるわけないやろ。ワシを何年生だと思ってるんねん。」

「何でお前まで関西弁になってるんよ!!」

「あ、すまん。ついノリで・・・」

「ノリで!? ノリで関西弁になるんかつ!？」

「んで、まあ、ここはどこ？」

「せやから、ちょこの国やて。」

「あっほかーい!!」

我慢できなくて、勢いよく突っ込んでしまったよ。

「な、何やねんお前！」

「ちょこの国なんて存在すると思ってるのか!? このドグサレ妖精! 妖精なんてコロポックルが限界やぞ!!」

「限界もクソもないっちゅーねん!! 現にワシは存在しとるわ!!」

あ・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・。

沈黙。

そこで私は、

「あほか！空気がつらいねん！」

またもつつこんでしまいました。

「うおう！？だから何でお前まで関西弁になってるんよ！ノリか！？ノリなのか！？ノリが必ずしも許されるとは思うなよ！」

「やかましいねん！アニメだって「だって俺、王子だもん」で済まされる世界なんだよ！だからノリもセーフだ！」

「セーフって！！どこまでがアウトでどこまでがセーフなん！？」

「妖精」

私は、妖精に言い聞かせるように言った。

「そこはつつこんだら負けだ。」

「ちよお待てやあ！！負けるか！！負けてたまるか！！」

「待てるかあ！つつこみのタイミングがお笑いの命やねん！！」

「別にお笑いは目指してないわ！！」

「だまらっしゃい！それが出来ない奴は関西の恥やねん！」

「関西育ちでもない奴が、何を語っとんのや！」

「お前こそ関西育ちじゃないやろが！マフィア風情が何をほざいとんのや！」

「マフィアじゃないねん！お前は漫画の見すぎや！」

「だまつとり！そこまで言うなら地獄道やってみいや！」

「できん！普通にできんよ！！」

口喧嘩関西弁verを繰り返してる間に、本当につっこむところを忘れていた。

「妖精、お前の名前はなんやねん」

「そうやなあ・・・関西のまどん」

「はい、関西のメリー・ポ ンズやね」

「ちやうねん！関西のマドンナとでも呼びいや！」

「うーん・・・じゃ、ながいから「窓」な。」

「それはないやろ！」

「じゃあ何にすればいいとねー！！！！！」

「いきなり口調変わったああ！！！」

「んで？何にすればいいとね」

「じゃあ・・・ちよこの妖精・キャンディ ロットで。」

「ネーミングセンス悪っ」

「じゃあ何にすればいいとねー！！！！！」

「さあ。ムキ太郎でよくね？」

「お前のほうがネーミングセンス悪いがな！！！」

「だまつとれやマフィア風情が！！！」

「マフィアじゃないってさっき言っただやろうが！！！」

「黙れムキたろおおおお！！！！！！！」

「そつちこそ黙れやネーミングセンス悪男！！！！！！！！！」

妖精のムキ太郎が現れた！

・・・・・・・・あれ？

なんか、気づいたら戦闘モードになってる。

どっするっ。

たたかう

まほう

どっぐ

や、どっするって言われても・・・

どっするっ。

どっす

まほう
どうぐ

よし！殺すぞ！

ちゅどー
ー
ん！！！！

ちよこの国（ムキ太郎曰く）では、漫画ちっくな爆発音が鳴り響いたと言う。

第三個 黒ウサギ、現る

私はムキ太郎を倒した後・・・いや、どうやって倒したのかは訊かないで。

うん、まあ、ムキ太郎を倒した後、私は、かるうじて生きていたムキ太郎にちよこの国のことを訊いた。

妖精

「ちよこの国にはな、ハーの女王様みたいにちよこの王様がいるんや。まあその名の通りちよこが好物なんやけど・・・。チャーとチヨコレート工場みたいに、ちよこも作ってるんや。そんで、うん・・・リア 鬼ごっこみたいな感じで、「この世に私以外が作ったちよこがあるのは気に入らん！」ってなことになって・・・」

歩

「ちよい待てやあ！なんやねんその自分勝手な理屈は！あれか！」「だって俺、王様だもん」とか言いたいんか！？しかも、全国の佐藤さんを狩る話にちよこを交わせんな！！」

妖精

「まあそうなんやけど、そこでちよこがめちゃくちゃ好きな人間を消していつて、大量のちよこを余らせて・・・全国のちよこ工場を潰そうっていう計画や」

歩

「ふざけんな！！なんかだんだんと佐藤さん狩りに理屈が似てきたよ！」

妖精

「それで、ちよこがめちゃくちゃ好きな人間はお前だけだつていうことがわかつたんや」

歩

「・・・まあ、ちよこをオカズにご飯を食べれるくらい好きやからな、ちよこ。」

妖精

「うそーん！！確かにそんなことできんのお前だけや！！」

・・・まあそんなことがわかって、何故私がここに来たのかと言う理由もわかった。

妖精

「つまりは、ちよこの王様をブツ殺せばOKっていう話や」

歩

「ふざけんなああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

妖精

「気にすることあれへんよ。ちよこの王様なんてクサるほどいるんやから」

歩

「そんなにいいいいいいいいいいいいいい！！！？？？？」

「？？」

妖精

「うーん……あと250体くらいいるんじゃないかな」

步

「ふざけんなあああああああああああああ
あああああ！！！！！」

妖精

「まあ大丈夫やろ。あとの250体はちよこの王様候補、ついでところなんやから」

步

「だから今のちよこの王様を殺したら、そのちよこの王様候補が王様になるんやろうがあああああああ！……！！！！！」

妖精

「まあそこはウィー・ウォンカ方式で、お前が王様になればいいやろ」

步

「私は一刻も早く帰って、むっきゅんとバリーヌのドリー
が読みてえんだよクソ妖精があああああ!!!!!!」

妖精

「つーか作者！！何で毎度毎度ヒロインはむっきゅんとバリーヌが好きな腐女子設定になってんだよ！！」

歩

「それは作者が好きだからやる?」

妖精

「お前もそこで落ち着くなあああああ!」

歩

「まあ腐妖精は置いといて、どうやって王様を殺すん?」

妖精

「お前も殺す気満々やんけ!」

歩

「だって殺さんと帰れへんのやろ?」

妖精

「せやけど・・・」

歩

「せやから、その腐ったノウミソのクソキングは殺さへんとあかんねん」

妖精

「1、2・・・二言多いねん、お前」

歩

「帰らへんと、むっきゅんとバリ様に会えへんのや」

妖精

「お前・・・」

歩

「帰らへんと、むきゅバリの18禁が見れへんのや」

妖精

「アホ！お前まだ十四歳やないか！何見てんねん！」

歩

「お前みたいな年齢不詳に言われたくないわ！！」

妖精

「何でお前、「まだ見てへん」とか否定しないねん！！」

歩

「何事にも素直じゃなくちゃいけへん！」

妖精

「マセガキが何を語っとん！」

歩

「それが出来ない奴は関西の恥や！寧ろ、お笑い界の恥や！」

妖精

「せやから、関西育ちでもない奴が何を言っとんねん！！」

再び関西弁バトルをしていると、・・・不思議の国のポリスに出
てくるあのウサギがやってきた。

妖精

「お、m r・ゲームアンド時計やないか」

歩

「随分個性的な名前やな！しかも時計を英語に直したら、随分聞き覚えがあるよ！」

G & 時

「これはこれは、あなたが人間界からやってきた脳味噌ドグサレ腐女子さんでしたかな？」

歩

「死ね」

妖精

「G & 時！あんた紳士的な口調で何をほざいとんねん！」

G & 時

「住みません、つい本心が」

歩

「住まんで済むなら不動産いらんわ」

妖精

「お前らどこのCM担当者だ！」

G & 時

「いえ、ほんとすみません。歳なもので」

妖精

「!!!!!!!!!!!!!!」

G
&時

「おや、そうでしたか？すみません。」

歩

「……真心こもってねえな」

G
&時

「なんか言ったかクソボケ。……まあそういうことなんで、今からハゲジジイ……いえ、お坊さんが来てくれるそうです」

妖精

「今ものすごい暴言が聞こえた気がするんやけどな……」

G
&
時

「気のせいですよ」

步

「そんなわけあるか！ 今私のことクソボケって言っただろ！ アホ」

G
&
時

「黙れエセ関西弁。．．．さ、行きますよ、妖精さん」

- 思ったこと

こいつ、黒つつつ!!!!!!!!!!

ウサギのゲーム&とけいがあらわれた！

・・・あ、また戦闘モードに・・・。

どうする？

たたかう

まほう

どうぐ

なかま

や、どうするって言われてもね。

どうする？

ころす

まほう

どうぐ

いけにえにささげる

歩

「よし、君に決めた！妖精、逃げ！」

妖精

「え、ちよっ」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

い
う。

第四個 王様来る！（早っ）

どうやってかm r .ゲーム&時計を倒した私と妖精は、王様を殺す計画を練り始めた。

妖精

「さて、どうやって王様を殺すかやけど」

歩

「腹を引き裂いて、中から腸でも取り出せばええんやないの。そして沢に流そう」

妖精

「ちよお待てやあ！何、青少年の教育に悪い発言しとんねん！」

が、のように私が案を出せばクソ妖精がすかさず異議を唱え、

妖精

「スプーン兵になりきって、王様を殺しに行けばええんやないか？」

歩

「えー・・・あのペライスプーン兵になりきるのは無理やろ」

のように妖精が案を出せば、私が異議を唱えるという状況が続いていた。

歩

「このままじゃ埒が明かん・・・」

妖精

「どうする?」

歩

「もう読者にもわかりやすく、サクッとじゃんけんで」

妖精

「随分投げやりだなあおい!!」

歩

「文句あるならお前が一人でちよこの王様をぶっ潰しに行けばいいだろ。かつ消すぞ」

妖精

「ちよ!何か妙に圧力かけてると思ったら、いきなりザン様来たよ!!」

歩

「文句あるのかい。無いのかい。どっちなんだい」

妖精

「ああ!!終いには某芸人のパクリ来たあ!!」

歩

「つつこみは賛成とみなす」

妖精

「そんな法律聞いたことないよー!!」

歩

「よし、じゃあ、じゃーんけーんホイ」

妖精

「あーいこーでホイ」

歩

「あーいこーでホイ」

妖精

「あーいこーでホイ」

歩

「あーいこーでホイ」

妖精

「あーいこーでホイ・・・」

歩

「あーいこーでホイ・・・」

妖精

「あーいこーでホイ・・・」

い。
どんな状況になっているかは、二人の台詞のみでご想像ください。

歩

「あーいこーでホイ・・・・・・・・」

妖精

「あーいこーでホイ・・・・・・・・」

歩

「あーいこーでホイ・・・・・・・・・・・・・・・・」

・

妖精

「あーいこーでホイ・・・・・・・・・・・・・・・・」

・
・
・
・
」

歩

「あーいこーでホイ・・・・・・・・・・・・・・・・」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」

妖精

「あーいこーでホイ!!」

歩

「あーいこーでホイ!!」

妖精

「a i k でホイ!!」

歩

「微妙な位置の歌手を出すなよ! あーいこーでホイ!!」

妖精

「うつせえ黙つてろ！ あーいこーでホイ……………」

歩

「死ね！ あーいこーでホイ……………」

妖精

「果てろ！！ あーいこーでホイ……………」

歩

「堕ちろ！受験落ちろ！ あーいこーでホイ……………」

妖精

「何その低レベルな暴言！ あーいこーでホイ……………」

！

歩

「うつせえ黙れや！ 王様殺しの汚名はお前だ！ あーいこーで

h

「私がどうかしたのかね？」

二人の心の声

『ウワアアアアイ王様だあああああ』

『

目で語っています…歩

『ホラ、王様だよ。さっさと殺せよ』

目で語っています…妖精

『できるか 今ここでそんなことが出来る奴は、来世はトイレッ
トペーパーになったらいいや 』

目で（以下略）：歩

『・・・どうすんの、これ？』

：妖精

『・・・・・・・・・・・・・・・・自分で考えろYO 』

：歩

『何その無責任。わかった。好きにしていんだな？』

歩

「王様」

王様

「何だ」

歩

「死ね」

ち
よ
こ
の
お
う
さ
ま
が
あ
ら
わ
れ
た
！

！

あゆむ
は
ちからつきた

あゆむ の めのまえは まっくらになった

ここで、私の意識は消失した。

かと思われたが。

人間の生命力というのはすごいものだよ。

私、まだ生きてた。

ちよこのおうさまに10000000000000

「うわー――やーらーねーたー――」

あゆむのこづげき！

00000000のダメージ!!!!!!!!!!!!!!

歩

「うそーん!!王様よわっ!!」

妖精

「……………お前が言えることじゃないやろ。お前、あと0・1でもくらってたらしんでたぞ」

歩

「それにしても……ラスボスがコレじゃあ……」

妖精

「バカ言え。まだだぞ」

歩

「な——————にいいいい!!!!!!?????」

妖精

「せつかくだからひっぱろうと思ったんだが……読者様もそろそろ飽きてきた頃だろ。じゃあ、次の作品をお楽しみに」

「うそ」
「」
ん

歩

ながらくお付き合い、有難う御座いました！
めちやくちや詰まんなかったと思いますが、これからもできたら
書き続けるつもりです。

では、またいつか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951d/>

ちょこで とりっぷ

2010年10月12日03時21分発行